

一乗法華を広宣する者は万人が地涌の菩薩（母の子）である。法華経は教主釈尊前生の「積功累徳求菩薩道未嘗止息」の菩薩の精神をとらえ「善学菩薩道不染世間法」と吾も人も教誡する菩薩である。久遠の本師教主釈尊の「毎自」の本願の中に安立し、心もおだやかに安らぎ浄らかな心で人々と共に喜び共に悲む菩薩である。人々と共にこの娑婆世界の中に安住し「如蓮華在水」の悟りの境地にあって、しかも一乗法華の仏道、菩薩道を求めて止まない「昼夜常精進」の永遠の菩薩である。

後世、日蓮聖人が上行菩薩の自覚に立って、末法応時の本門の法華仏教を創唱されたが、この点天台大師よりも一層本源的に法華経の精神を悟られたものといつてよからう。（未完）

## 十界構造論

——四面の構造——

服部 即 明

十界を心の構造として把える時、四面体として考えら

れることは前回論証した。今回は交流分析の所見を参照し、それぞれの面の特質を述べる。

### 1、交流分析

エリック・バーンが創始し、精神分析の口語版と言われる。人格を形づくる自我状態を親の心P、大人の心A、子供の心Cの三つに分け、更にPを保護的なPと偏見的なPとに分け、Cを自由なCと順応したCとに分ける。Aは理性と深く関係しており、適応性や統合性を持ち、冷静な計算にもとづいて働く。自我にとって大切なことは、PACがくっついて全体をなすと同時に、それぞれが独立した状態にあることである。これら三つの自我状態の境界には半透過性の膜のような物があり、それを通して一つの状態から他の状態に精神エネルギーが移動すると考える。一つないしそれ以上の自我状態が人格の全体から締め出されている状態を「除外」という。一つの自我状態の精神エネルギーが他の自我状態に自由に流れ込むことを「汚染」という。交流の場で自分はPACのいずれを向けているのか。又彼は自分に対して、Aによる対処の仕方を考えようとする。更に深くはゲーム分析、脚本分析等興味深いものがある。

## 2、欲望面（子供の心C）

睡眠欲・食欲・性欲等身体的・生物的本能の座であり快感原則に従う。直視・創造・空想等自由な伸び伸びした心が特色であるが自己中心的存在である。感情面の汚染を受けると残酷な心、理性面からの汚染によって卑屈な心が生じる。他面を除外すると欲張りの心を生じ、他面から除外されると楽しむことができなくなる。欲望面を相手に向ける傾向のある人は、成長することを望まない少女趣味的な人。責任感が無く人をあてにする人。良心が無いように振舞う人。いつももてはやされていた人等がある。

## 3、感情面（親の心P）

攻撃欲・権力欲・名誉欲等心情的・社会的欲望の座である。範囲は二者間に止まり、行動の原型は模倣である。保護・養育・同情・親密・容認等が特色である。欲望面の汚染に合うと溺愛に変じ、理性面の汚染によって批判・批難・叱責等の心が生ずる。他面を除外すると甘い心、除外されると思いやりがなくなり、ヒステリーや反社会的行動に走る。感情面が向きやすい人は、世話やき。批判的な人。道徳主義的な人。支配的・権威的な人。慈善事業家等に見られる。

## 4、理性面（大人の心A）

美的欲求・知的欲求・愛情への欲求等精神的・文化的欲求の座である。範囲は広く社会全般に広がり、思考が中核になる。公正・冷静・能率・協調等合理性が特色である。欲望面から汚染されると妄想にとらわれ、感情面から汚染されると、独断や偏見等のかたよりを生ずる。他面を除外すると自己犠牲的な行動をとり、除外されると精神病やノイローゼになる。理性面を向けがちな人は常に客観的で人趣味に乏しく人を退屈させる人。機械的な仕事を愛する人。冷徹な外科医等に見られる。

## 5、靈性面（神仏の心）

生命の充実・融合・統一・円満等本源的な欲求の座である。範囲は人間社会を超越した次元で、悟りが中核となる。無我・法悦・懺悔・誓願・慈悲等宗教性が特色である。先の三面とは性質を異にし、汚染や除外は関係しない。三面が社会へ向っているのに反し、三面の背後にあって、或は劣弱な為に片鱗も表れず、或は大きく豊かに成長して、三面を包み込むのである。ウィリアム・ジエームズの自我の分類によれば客我（身体我・社会我・精神我）に対する、主我（本質我）に当たる。

## 6、靈性による統一

交流分析では、あくまでもAが主導権を握っている。

池見酉次郎氏は著書「統・心療内科」の中で、このような「西欧的自我」でなく、絶対に主体的で孤独な「本当の自分」と自分を支える大自然の中にもあるあらゆる存在者との連帯感に立つ「東洋的自我」の確立こそ心身医学的ゴールであると述べている。これは靈性の開発でなければならぬ。靈性が開発された時始めて自我の融合・統一がなされ、感情も欲望も、更には知性までもそれぞれ本来のあるべき姿で発現する。これは、小乗で二乗の果が求められ、大乘それも法華経へ来て始めて開三顯一が説き明かされた状況に似ている。この時、心は四面体から球体へと変容し円満な姿を表す。この原理を信心・行法・行事等にあてはめて、世界に通用する行学不二の宗教つまり、知目行足の知が行の目となり、行が知の足となる、科学とも矛盾しない宗教を期したいと思う。

## 台湾仏教における今昔

岡田栄照

明治二八年、台湾は日本の領有に帰するが各地で武装抗日斗争が執拗に反復された。

林小貓、鄭青、林玉衡、柯鉄虎、黃選、簡施玉、簡義、陳法、胡嘉猶、陳秋菊、簡大獅、蔡清琳、劉乾、黃朝、羅福星、李阿斉、陳阿栄、張火炉、羅嗅頭、林老才等々を中心代表とする事件が頻発し、大正四年には余清芳を首謀者とするかの西来庵事件が発覚し翌年鎮定され検挙者一九五七名、死刑を宣告された者八六六名という陰惨な結果をみた。辛亥革命に触発され、神託を利用して齋堂の組織によつて齋友を煽動した革命運動は挫折したが、宗教界に与えた影響は甚大であり、この事件を契機として齋教徒の多くは日本の曹洞宗、臨濟宗に保護を求めた。

当時、曹洞宗が中心となり成立させた愛国仏教会台南仏心社宗教聯合約束章程の六条に「籍神仏名号誘騙愚民財物：」七条に「蔑視官長誹謗時政炫異杵奇捏造邪説